



モーターパラグライダー エプロン通信員 城間 ちえみ

♪こんなこと、いいな、  
できたらいいな。  
空を自由にとびたいな。  
はい、タケコプター♪

先日初めて遊覧飛行モーターパラグライダーを読谷の木綿原ビーチで体験した。

パラシュートに扇風機のようなエンジンを負ってビーチ等の平地から飛べるのがモーターパラグライダーだ。エンジンの力で高度調節は自由自在。大空を飛ぶ感触はまさにドラえもんタケコプターのように私には思えた。

モーターパラグライダーのダンデムパイロット資格を持ち「キャリア十数年の空人」が後ろに乗り砂浜を二、三步駆け出した次の瞬間離陸した。

不思議なもので地上から五センチ離れただけで鳥になったような気分になり、一〇〇m上昇する頃には段々と人や建物が小さく見えて、今この空を飛んでるといふ感動が、凄く気持ちよく、別世界にいるような気分になった。

この日は天気がよく、見渡すと緑と砂浜、エメラルドグリーン

下に見えるさんご礁、リーフを挿んでコバルトブルーの海に浮かぶ島が水平線と空の狭間にはっきりと見えた。

なんと綺麗なそして素晴らしい光景だろうか。わずか十分間の滞空時間だったが、改めて沖縄の自然の美しさを実感した。

大自然からみれば、人間の存在なんて小さいものにしか過ぎないのに、自分のエゴのために他と争い、はたまた数多くの自然を破壊してるといふことを考えなければいけないと思った。

エキサイティングな大空の散歩、ぜひ、あなたも体験してみてくださいいかがですか？



ぐわーゆんたく

43

アガリイサガマの証言

米軍による艦砲射撃が始まった一九四五(昭和二〇)年三月下旬、真栄原のアガリイサガマには、真栄原の人びとをはじめ、大謝名や宇地泊、那覇の人びとなど、二千名ほどの一般住民が避難していました。と同時に、住民のほかにも友軍の兵隊約千名が壕の中に入っており、アガリイサガマには軍と民が混在していました。米軍が沖縄島に上陸すると、友軍は壕から出て行き、一般住民の多くも島尻方面へ離散していききました。その時、壕に残った住民はわずか四、五十名ほどでした。

その中の一人だったある男性は、顔見知りだった友軍の兵隊から「いざという場合はこの手榴弾で死んで下さい」と言われ、手榴弾を手渡されたと言っています。この男性は、手渡された手榴弾で、壕に残る住民とともに自らも命を絶とうと思ったそうです。結局、そういう気持ちにはなれず、米軍に投降す

る際に手榴弾を全て壕の奥の水溜りに棄てたと言います。

軍民が混在し、「集団自決」が起り得た状況の中で、アガリイサガマの住民の命は救われました。「軍隊は住民を守らない」という沖縄戦の教訓とともに、「命を尊重する」という意志を私たちは学んでいきたいと思っています。



真栄原・アガリイサガマ 1981(昭和56)年撮影

☆「宜野湾市史」への問合せ  
教育委員会文化課  
☎八九三ー四四三三